様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２５０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７００６７１

研究課題名（和文）成人労働者におけるストレス対処能力ＳＯＣの形成に関する縦断研究

研究課題名（英文）The deveropment of sense of cherence in adult workers: longuitudinal data analysis

研究代表者
戸ヶ里　泰典（Togari, Taisuke）

放送大学・教養学部・准教授

研究者番号：２０５０９５２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,400,000円、（間接経費）　720,000円

研究成果の概要（和文）：sense of coherence（SOC:首尾一貫感覚）は健康保持機能・ストレス対処機能が検証されているが、その形成・発達について明らかになっていない。そこで、SOCの形成・発達に関連する基礎的な知見を得るために、SOC自体の変化に関する基礎的な知見を踏まえ、労働者を対象とした縦断データを用いて分析し、SOCの向上につながる要因を探索することを目的とした。その結果思春期における変化とは異なり心理社会的職場環境が原因であり、SOCが結果であるという明確な因果関係を明らかにすることができた。また、心理社会的職場環境の良好な変化がSOCの上昇的変化を促すという関係性を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：Sense of coherence: health maintenance function and stress coping function is validated, but it has not been clear about its formation and development. Therefore, in order to obtain the basic knowledge associated with the formation and development of the SOC, and analyzed using the longitudinal data based on a basic knowledge of changes in SOC itself, pourpose of this research is exploring psycho-social work realted characteristics which leads to an improvement in SOC. Psycho-social work characteristics were possible to reveal a clear causal relationship, that is, work characteristics were cause and SOC is result. Further, it was possible to examine the relation of good change in psycho-social work characteristics that encourages the increase change in the SOC.

研究分野：スポーツ・健康科学

科研費の分科・細目：応用健康科学

キーワード：健康生成論　首尾一貫感覚　心理社会的職場環境　メンタルヘルス

１．研究開始当初の背景

Sense of coherence（SOC）はストレス対処機能、健康保持機能を持つ生活や人生に対する向き合い方に関する概念である。この概念を用いた実証研究は 1990 年代以降飛躍的に増加しており、死亡率や各種疾患の罹患率の予測に関する縦断研究や、ストレッサーのメンタルヘルス・心身健康に及ぼす影響を緩衝する緩衝効果を持つこともわかっている。こうしたことから、2005 年から 2006 年にかけて相次いでシステマティックレビューの結果が報告され、SOC と健康、Quality of Life、との関連性が明らかになっている。その一方で、SOC の形成・発達に関する研究は十分に行われておらず、どのように SOC が発達し、向上するかについての要因を探索していくことが SOC 向上策に資する上で重要な研究課題となっている。

２．研究の目的

SOC を提唱した Antonovsky は SOC の形成・発達において幼児期や思春期における経験の重要性を指摘していることに加えて、同時に成人期における職業や職業から得られる良質な経験が SOC の形成・発達・向上において重要である可能性を示唆している。そこで、まず、SOC の形成・発達に関連する基礎的な知見を得るために、高校生を対象とした 3 年間の縦断調査データより SOC 自体の変化についてその変化の動向とその可能性を把握した。次に、主として職業をもって働く労働者を対象とした縦断データを用いて分析し、SOC の向上につながる要因を探索することを目的とした。

３．研究の方法

まず SOC の形成・発達に関する基礎的な知見を得るために、高校生を対象に 3 年間 9 時点の調査を行った「高校生の生活と生きる力に関する調査」データを用い、SOC の変動の実態と変化を促す要因の探索を行った。ここでは、主として SOC 自体のスコアの変化を測定し、3 年間 9 時点における直線的あるいは曲線的な変動について潜在曲線モデルを用いて評価した。また SOC の予測可能性について他の well-being 要因との関連性（学校帰属意識、学業遂行度、進路選択順調度等）との関連性、メンタルヘルスインデックスとの関連性の検討を行った。

次に、東京大学社会科学研究所が実施している JLPS 調査データを用いて、主として、心理社会的職場要因「自分の仕事のペースを自分で決めたり変えたりすることができる」、「仕事を通じて職業能力を高める機会がある」、「今後１年間に失業する可能性がある」などの項目を用いた。また SOC は一般住民調査向け 3 項目 7 件法版 SOC スケール（SOC3-UTHS）を用いた。ほかに、アウトカム変数として、健康度自己評価、生活満足度、メンタルヘルスインデックス（MHI-5）を用いた。分析は主として 2 通りを実施した。一つは職場環境を説明変数、SOC を従属変数という関係性を前提とした cross-lagged model であり、2 時点の分析および隔年で 5 年追跡した 3 時点の分析を行った。次に心理社会的職場環境および SOC、各種健康状態のそれぞれの 5 時点の水準および変化を変数とした潜在成長曲線モデルを用いて評価を行った。

４．研究成果

1）SOC スコアの基礎的変動の実態について

高校生を対象とした調査の結果、SOC は入学後に一度落ち込み、10 か月後 12 か月後で一度底をつき、その後上昇に転ずる下に凸の二次曲線的変動を示す可能性が示唆された。

また、SOC と心理社会的環境要因ともいえる学校帰属感覚および well-being との関連性については、原因と結果の関係が、時期、性別により異なる傾向にあることが明らかになった。このことは、SOC が高いことにより環境に対する知覚が左右されるという、一見して逆の関連性を、思春期においては見せる可能性が示唆されるものであった。（雑誌論文（1）、図書（1））

2）労働者における心理社会的職場環境要因と SOC、および well-being との関係について～cross-lagged model での検討

労働者を対象にした研究では、SOC 自体の変動は年齢を追うごとに緩やかに上昇しており、高校生における大きな変動とは異なる傾向にあることが分かった。また、心理社会的職場環境要因と SOC の 2 年間の縦断的データによる cross-lagged model による因果関係の検討では、男性、女性ともに心理社会的健康状態が原因、SOC が結果であることが明らかになった。（雑誌論文（2））

さらに、5 年間 3 時点の検討に拡大して同じく cross-lagged model での検討を行ったところ、こちらも、交絡因子を調整しても、心理社会的環境要因が原因で SOC が結果であるという関連性が明確に明らかになった。さらに well-being（メンタルヘルス）との関係を見ると、心理社会的環境要因と well-being は SOC を媒介しており、直接の関係性が見られないことが明らかになった。このことから成人期における SOC の形成・発達は思春期までと異なり、SOC が心理社会的環境の知覚に影響を及ぼす可能性が低く、むしろ心理社会的環境の曝露経験により SOC に影響される可能性が大きいということが明らかになったといえる。また、well-being との関係についても、well-being が高いことによる SOC への影響は成人においては考えにくく、むしろ SOC 自体が健康保持機能、ストレッサー対処機能を発揮して well-being を得ているという Antonovsky による仮説が検証されたものと考えられる。心理社会的環境要因と well-being と間を SOC が媒介するという点については、理論的に矛盾はないが、このモデルの場合、心理社会的要因から well-being への直接効果が見られず SOC の媒介効果のみが見られているという点については、今後慎重な考察および再現性の検討が必要といえ

よう。(雑誌論文 (3))

3) 労働者における心理社会的職場環境および SOC、各種健康状態のそれぞれの 5 時点の水準および変化の関係性

5 年 5 時点の追跡データを用いて労働者における心理社会的職場環境および SOC、各 well-being 指標との関係性について検討を行った。その結果、SOC の水準および SOC の変動と、各 well-being 指標との関連性は十分に認められた。次に、心理社会的職場要因の水準および変化と SOC の水準および変化との関連性の検討では、以下のことが明らかになった。(1)「職場の仕事のやりかたを自分で決められる」職場の水準が高いほど、「高い SOC」をもつ人が多い傾向であること、(2)「職業能力を高める機会がある」水準が高いほど、「SOC」が上昇的変動を見せること、(3)「職業能力を高める機会がある」程度が向上した職場であるほど「SOC」の向上が見られたこと、(4)「今後 1 年間に失業(倒産)する可能性がある」の水準が高いほど「低い SOC」の水準である人が多い傾向にあること、(5)「今後 1 年間に失業(倒産)する可能性がある」の水準が高いほど、「SOC」が低下する可能性が高いこと、(6)「今後 1 年間に失業(倒産)する可能性がある」程度が上昇した職場であるほど「SOC」が低下する可能性が高いことが明らかになった。(学会発表 (1) (2) (3) (4))

このことは SOC の、心理社会的職場要因と well-being との関係における媒介効果が明らかになったことに加えて心理社会的職場要因の水準とその変化によって、SOC の変動が誘発されるという可能性を明らかにしたものである。特に、職業能力を高める機会(職業教育制度)の充実に加えて、失業不安とその増強が SOC の向上あるいは低下に影響していた点、裏を返すと、失業の不安がない場合 SOC の上昇的変動が期待できる点など、SOC と環境との関係性を明確に明らかにすることができたといえる。

2 年間の水準と変動を検討した研究は見られているものの、5 年間 5 時点におけるこうした検討結果はこれまでに世界的にも検討されていないことから、引き続き分析、公表作業を続けていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1) Taisuke Togari, Miho Sasto, Yoshihiko Yamazaki, Reika Otemori., The development of Japanese 13-item version of psychological sense of school membership scale for Japanese urban high school students., School health, vol.7, pp62-72

(2) Taisuke Togari, Yoshihiko Yamazaki, Causal relationship between sense of coherence andpsycho-social work environment: from 1-year follow-updata among Japanese young adult workers., Global Health Promotion, vol.19, no.1, pp32-42, 2012.

(3) 戸ヶ里泰典, 一般成人男性における心理社会的職場特性と精神健康との関係における sense of coherence の媒介効果 ―JLPS 調査データによる 3 時点 cross-lagged model を用いた検討―, 理論と方法(Sociological Theory and Method), vol.27, no.1, pp41-61, 2012

〔学会発表〕(計 5 件)

(1) 戸ヶ里泰典、山崎喜比古、中山和弘、石田浩. 心理社会的職場環境要因と well-being との関係における sense of coherence の媒介効果に関する研究―3 時点パネルデータの解析結果より―公衆衛生学会第 37 回日本保健医療社会学会大会(大阪大学)2011

(2) 戸ヶ里泰典、山崎喜比古、中山和弘. 心理社会的職場環境の評価の変化と首尾一貫感覚 SOC および well-being との変化の関係―2 年間の追跡データより―第 77 回日本民族衛生学会総会(東京大学)2012

(3) 戸ヶ里泰典. 若年成人男性労働者における心理社会的職場特性と健康状態との関係における sense of coherence の媒介モデルの検討. 第 86 回日本産業衛生学会(愛媛)2013

(4) Taisuke Togari, Kazuhiro Nakayama, Yoshihiko Yamazaki. A mediational model of sense of coherence in relations between psycho-social work characteristics and well-beings for Japanese general workers: 5point latent growth curve model analysis. 21st IUHPE World Conference on Health Promotion 2013, Pattaya, Thailand

〔図書〕(計 1 件)

(1) 山崎喜比古、戸ヶ里泰典編・著, 思春期のストレス対処力 SOC, 有信堂高文社 東京,2011

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
戸ヶ里泰典（Taisuke Togari）
放送大学・教養学部・准教授
研究者番号：20509525

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：